HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	文化による『サロメ』の変容 : 日本での受容をめぐって
Author(s)	佐藤, 美希
Citation	北海道英語英文学, 48, 23-32
Issue Date	2003-06
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/35587
Type	article (author version)
File Information	sato-1.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

文化による『サロメ』の変容　―　日本での受容をめぐって

佐藤美希

１．はじめに

オスカー・ワイルドの『サロメ』は、日本では人気の高い戯曲である。しかし、この人気の高さはあらゆる文化に普遍の評価ではない。日本における『サロメ』がどのように受容されているかを西洋、特にイギリスと比較すると、日本とイギリスにおける解釈の違いが浮き彫りになってくるのである。Karl Toepfer が論じているように、イギリスにおいて『サロメ』がキャノンとしての地位を得てこなかった一方で (Toepfer 9-10)、『サロメ』の日本語訳は明治時代から現在までに 20 種類以上あり、上演回数も多い[1]。このことからも日本における『サロメ』受容の積極性と人気の高さは、イギリスでのそれを凌駕しており、特筆すべきものであることが窺える。本稿では、西洋と日本における『サロメ』の解釈の違いを明らかにし、この違いが何に起因しているのかについて考察を試みる。

２．西欧での『サロメ』解釈の傾向

まず、イギリスでの『サロメ』出版当時の書評について概観する。*The Times* (23 February 1893) は ‘It is an arrangement in blood and ferocity, morbid, bizarre, repulsive, and very offensive in its adaptation of scriptural phraseology to situations the reverse of sacred’ [2]と辛辣な書評を載せた。Max Beerbohm の書簡によると、*The Daily Telegraph* (24 February 1893)も‘Mr Wilde had distorted the facts of one of the most straightforward of Biblical tales and that his version of it left an unpleasant taste in the mouth’[3]と述べて作品に対する不快感を露わにし、Pall Mall Gazette (27 February 1893) に至っては『サロメ』は様々な作品や聖書から寄せ集めた ‘mosaic’ に過ぎず、ワイルドの独創性は見られない、と酷評した[4]。その一方で、当時の世紀末芸術を支えていた芸術家達は『サロメ』を称賛に値する作品として高く評価している。例えば Beerbohm は ‘In construction it is very like a Greek play: yet in conception so modern that its publication in

any century would seem premature. It is a marvellous play. […] I say it is a marvellous play. It is a lovely present'[5] と感嘆し、William Archer はワイルドが『サロメ』執筆に際して影響を受けたとされるメーテルリンクとワイルドを比較し、'There is far more depth and body in Mr. Wilde's work than in Maeterlinck's.…His [i.e. Wilde's] palette … is infinitely richer. Maeterlinck paints in washes of water-colour: Mr. Wilde attains the depths and brilliancy of oils. Salome has all the qualities of a great historical picture'[6]とワイルドを称賛した。

このような正反対とも言える評価の違いには、道徳的・宗教的な健全さを重要視するか、あるいはそのような健全さとは相容れなくても高い芸術性を重要視するか、という対立構造が現れている。即ち、ヴィクトリア朝の特徴である道徳性、いわゆる「善」の過度な強調と、その「善」への懐疑から生じた唯美主義的思想の二者の対立である。唯美主義者達にとっては道徳や「善」と両立はしないが芸術性を持つ『サロメ』は称賛に値する。一方で、道徳的な「善」や健全さの背景にはキリスト教が強固に存在している。そのため、聖書を題材にしている『サロメ』は、キリスト教の価値観から見て「善」か「悪」か、健全か不健全かという二項対立の判断を基準に解釈されることになる。つまり、現実世界に根付いているキリスト教の価値観で作品も判断されるのである。その結果'morbid'、'repulsive' といった否定的な判断が下されることになるのである。

現代における『サロメ』批評にも二項対立の概念が見受けられるが、出版当時の批評のような二項対立による作品の是非ではなく、作品の解釈として、moral / immoral、sacredness / blasphemy、good / evil といった二項対立の概念が適応される。例えば、Philip Cohen や Guy Willoughby は saint / sinner、moral / immoral や chastity / voluptuary という概念を適応し、サロメとヨカナーンそれぞれに罪を犯す者と神聖な者という対立を読みとっている。Cohen はヘロデの中に情欲という罪とその罪の意識からの救済を求めるという相反する意識を読み取り、情欲の罪はサロメに、罪からの救済はヨカナーンに、それぞれ具現されていると解釈する(Cohen 156-9)。Willoughby は、サロメとヨカナーンそれぞれに情欲と貞節の両者が共存すると解釈する(Willoughby 77-87)。Christpher Nassaar や Rodney Shewan は、moral や

goodness の対立概念としての evil に焦点を当て、サロメの悪魔性を人間性や女性の普遍的な特徴として解釈している。Nassaar は人間の悪魔的な部分を強調し、その悪魔性を描く芸術性を高く評価し(Nassaar 80-109)、Shewan はサロメこそ本質的に悪を内包する人間性のシンボルであると考え、その上で、moral が「悪」に偏見を与えて歪曲したと指摘する(Shewan 134-147)。このように、現代における作品解釈にも、二項対立の価値観を解釈装置として用いていることが明らかである。

以上のような出版当時から現代までの『サロメ』評価・解釈の考察から、次の三点を英米におけるこの作品の解釈の特徴と考えることができるだろう。第一に作品解釈の手段として二項対立に基づく価値判断の適応が挙げられる。Antony Easthope は二分法の価値観がヨーロッパ思想を形成してきたとする議論を肯定しているが（Easthope 133-4）、『サロメ』解釈にも二分法による価値判断が適応されていると考えられる。第二に、現実社会に適用している世界観を作品世界へ直接的に投影する解釈方法が挙げられる。即ち、テクストの世界を現実と同様の世界と認識して作品を解釈していくストラテジーがとられているのである。第三として、上記の二点に起因する、「純潔」に対する対抗概念として女性の「情欲」を罪悪と見なす価値基準を挙げることができる。『サロメ』解釈における上記三点の介入にはいずれもキリスト教の思想が決定的な役割を果たしているのではないだろうか。サロメのヨカナーンに対する情欲はキリスト教の価値観では「純潔」ではないことから「罪悪」、少なくとも「不健全」であると見なされ、道徳性やキリスト教の神聖さを犯すものと考えられる。このような価値判断は現実社会で適応される判断と同一であり、そのまま作品解釈に応用される。聖書の道徳観に支配される西洋の現実世界では、その聖書の精神に挑むかのような『サロメ』 は、やはり sacred / evil といった二項対立の概念を反映せざるを得ないと言えるだろう。

３．日本における『サロメ』解釈の傾向

３－１．批評をめぐって

『サロメ』が初めて日本に紹介されたのは 1907 年、森鴎外によってであるが、当時は好意的に受容され、積極的に上演もされた[7]。1913 年にイタリア人演出家を招いた日本人劇団による最初の公演がなされており、井村君江がその演出を巡る当時の受容態度を考察している（井村 102-8）。その考察から日本における『サロメ』解釈を特徴づける上で興味深い点が見られる。演出がヨカナーンの首を求めるサロメの悪女性や妖艶な七つのヴェイルの踊りのようなサロメのグロテスクな部分を特に強調するものであったことに、島村抱月、小宮豊隆、翻訳者の中村吉蔵らは、台詞や人物造形の繊細さに注意が払われていない、表面的に現れるサロメの情欲が彼女の複雑な内面性と結びつけられていない、作品の象徴的・神秘的特徴が削除されてしまっている、などと厳しく批判した。このような彼らの作品解釈には西洋のものとは異なり、二項対立に基づく「悪」の強調は見られず、むしろその強調に対しては批判的である。さらに、現実的な価値観を超越した神秘・象徴を重要視する視点が明示されているのが特徴と言えるのではないか。

現代における作品批評もまた、西洋のそれとは異なる部分を呈している。例えば井村は、ヨカナーンに対するサロメの情欲を純粋なものと解釈する（井村 189）。この解釈は、moral や virtue に対する vice という対立概念ではなく、それらが混在する状態として西洋とは別の価値判断によるものと考えられるのではないか。さらに井村は、作品中の月の役割が喚起する神秘性を作品の中心と捉える。「サロメの劇において、月は中心の存在であった。月は神秘のベールで地上を被い、［中略］月は鏡のように人々の心を映し出し、支配者のように人々の言葉に耳を傾け、傀儡師のように人々の行為の糸を操り、預言者のように人の心の変化を色に現す。」（井村 60） 西洋の批評も月の象徴について考察したものがあるが、この非現実的な神秘性が中心に置かれることは稀である。木村克彦の『サロメ』解釈もこの延長上にあると言ってよい。彼は、現実社会の道徳性を超越したところにサロメの複雑な精神性を解釈し、サロメの情欲やそれに伴う死といった要素を good / evil という対立概念の枠組みでは判断していない（木村 124-137）。以上の例を見ても、『サロメ』の解釈は明治・大正期の作品解釈と同様に、道徳的な二項対立ではなく、非現実世界にのみ適応可

能な価値観に基づいていることが窺えよう。このような非現実性にのみ特化して芸術性・作品の意義を見出す解釈は、西洋と比較すると、日本独自のものと考えることが可能ではないだろうか。

３－２.『サロメ』から影響を受けた日本の文学作品

前項では、日本における『サロメ』解釈の一つの傾向を作品批評という観点から考察したが、『サロメ』からの影響が見られる文学作品を、作品の「読み」の一表象として考察する必要があろう。ここでは、『サロメ』に影響を受けて書かれたとされる泉鏡花『天守物語』、横光利一『淫月』、谷崎潤一郎『法成寺物語』の三つの戯曲について考察する。石崎等は、それらの作品の『サロメ』からの影響について、世紀末の雰囲気を日本の設定に映し出そうとしただけの表面的なものにすぎないと言及している（石崎 503）。しかし、これらの作品の設定、表現、人物造形などに『サロメ』の影響が色濃く映し出されている以上、各作家がこの作品をどう読み、各々の作品にどう投影させたかという興味深い問題が作品中に提示されているはずである。これらの作品を、日本人作家が『サロメ』をどう受容したかという作品解釈の表現として読むならば、西洋文化の価値観のもとで『サロメ』を解釈するのとは全く異なった、日本人の『サロメ』受容の特徴の一端を明らかにできるのではないだろうか。

『天守物語』[8]は、男の首を美しい姫君が愛でるという場面や、姫君が一目で恋をした相手への思いを語る場面などに『サロメ』からの強い影響が見られる。両者が大きく異なるのはその場面設定であり、『サロメ』の舞台が新約聖書に記述されるローマ帝国支配下でヘロド・アンティパス統治下にあるユダヤ分邦という具体的な現実の世界であるのに対し、『天守物語』には二つの世界、即ちヒロインの富姫に愛される図書之介が属する、封建時代の播州姫路の白鷺城という具体的な現実世界と、城の天守閣にある、富姫らが属する現実とは「別」の非現実世界が描かれている。「別」の非現実世界とは、現実に人々が存在する地上世界でも、死後の天上の世界でもない、その中間に漂流する、いわば物の怪の世界

である。ワイルドの『サロメ』が一つの現実世界しか持たず、そこではサロメの愛も情欲も成就しないのに対し、『天守物語』では現実と非現実の世界の交錯が描かれ、そこでは富姫の愛が成就されるのである。この作品は、鏡花が女性の情欲の成就を芸術的なモチーフとして受け入れていたこと、現実世界の価値判断が及ぶことの出来ない非現実世界を作品内に作り上げることでそのモチーフを具現化したこと、この二点の表れと考えることができるのではないだろうか。言い換えれば、この二つが鏡花の『サロメ』受容の特色と言えるのではないか。

『淫月』[9]にも『天守物語』同様に非現実世界が作品に創造されている。成仏できぬ僧侶に魅了され、その恋に取り憑かれた姫君が、憑依を取り去ろうとする主人に殺害されるという筋は『サロメ』の影響を疑う余地はないであろう。『淫月』もやはり非現実の存在である僧侶と、現実に存在する姫という交錯した二つの世界を描き出す。現実世界で姫は死んでも、非現実の世界で僧侶への愛は成就するという解釈は難くなく、非現実の世界と女性の情欲の成就とが結びつけられている点で、『淫月』に表れる横光の『サロメ』受容は鏡花の『サロメ』解釈の延長上に位置づけられると言えるだろう。

谷崎の『法成寺物語』[10]は、登場人物の関係が『サロメ』のそれと対応するように構成されている。ヒロインの四の御方はサロメ、良圓はヨカナーン、藤原道長はヘロデ、仏師の定雲は若きシリア人に相当する。四の御方と定雲の台詞などに『サロメ』で語られている台詞がそのまま使用されている。設定についても、『サロメ』の世界が聖書に描かれる史実の世界であるのと同様、『法成寺物語』も藤原道長が権勢を誇る平安時代という一つの現実世界が舞台となっている。しかし、『サロメ』がヨカナーンとサロメという生身の人間の対話であり、ヨカナーンの実際の姿を見てサロメが彼に恋をするのに対し、『法成寺物語』の四の御方と良圓は、互いを生き写しにした仏像を通して、互いが呪縛されるかのような超現実的な情欲に囚縛される。四の御方の良圓への情欲が現実としては成就しない点は『サロメ』と同様であるが、現実を超越したものが彼らの間に介在している点が『サロメ』との違いであり、『天守物語』や『淫月』との共通点でもある。つまり、現実を超越した何か

を介在させることによって『サロメ』の作品世界や芸術性を受容していると考えられる。さらに『法成寺物語』の特筆すべき点として、仏教への敬虔な信仰を象徴する仏像を媒介としながらも、それを彫る定雲自らが、仏の精神ではなく仏の外見の美、つまり四の御方の外見の美のみを崇拝すればいいのだと述べる場面があげられる。仏を神に置き換えてみれば西洋の宗教観においては冒涜的な考えを述べているのだが、この谷崎の表現には、聖書をもとにした『サロメ』の受容を下敷きにしながら、キリスト教の価値観に基づく価値判断が作品解釈に適応されてはいないことを示しているように思われる。谷崎は『サロメ』の中に道徳性・精神性を「善」とし、この「善」に相容れないものを悪とするようなキリスト教に基づく西洋の二項対立的価値観を読みとったのかもしれない。しかし、谷崎にとっての『サロメ』は、このような二項対立的価値観の範疇では扱いきれない、善か悪かという二分法では割り切れない独特の美意識によってしか理解できない世界をもつ作品だったのではないか。サロメが純潔な存在からファム・ファタールへ変化した一方で、谷崎が初めから恋い焦がれる相手を求める女性、一種のファム・ファタールとして四の御方を描いているのも、二項対立の価値観を適応せずに女性の情欲を芸術のモチーフとして受け入れた鏡花や横光と同様の感性で『サロメ』を受容したことの表れではないだろうか。

３－３．日本における『サロメ』受容の特徴

上述の『サロメ』紹介当時の受容態度、現代の批評、サロメに影響を受けた日本の文学作品の考察から、日本における『サロメ』受容の特徴を三点あげることができる。第一に、二分法の価値観を採用しないか、またはその両極端な価値観の混在を認めていく点が挙げられる。Hayashi and Kuroda も、日本人は西洋における二項対立的思考のような対比させるべき確固とした判断基準を持たないと指摘している (Hayashi and Kuroda 23)。彼らはその理由として、本居宣長の「もののあはれ」に言及し、絶対で不変の価値をものごとに持たせないという日本人の心性を説明している（21-22）。また、日本語の曖昧さが日本人の世界観の背景にあるとも述べている（33）。これらの指摘から、二項対立のような絶対的な対

立概念が日本の価値観には不在であるということが言えるだろう。この点が日本における『サロメ』解釈にも顕著に表れているのである。第二に、非現実世界や現実を超越した要素を作品解釈の中に認める点が挙げられる。西洋における『サロメ』解釈と比較して、この非現実世界の構築は独特な美的態度と言える。現実とは別次元の世界を作品世界に適応するのは日本独自の解釈傾向と考えられる。第三に、女性の情欲を伝統的に芸術のモチーフとして認めている点も挙げることができる。現実世界の中では、日本の女性はむしろ性的には抑圧されており、情欲は決して肯定される概念ではない。しかし、第二の特徴が示すように、作品の中に非現実的世界を構築することによって、芸術的モチーフとして女性の情欲を美的に再構成することができるのである。これも、女性の貞節を絶対のものとするキリスト教の倫理観に基づく西洋での解釈には見られない点である。このように、日本における『サロメ』受容は、前項で述べた西洋の解釈の特徴とは大きく異なった様相を呈していると言えるだろう。

４．解釈の違いが起因する文化的要素

これまで述べてきた西洋と日本との解釈の違いはどこに起因するのだろうか。女性の情欲を芸術として認めることができるという日本の傾向については、Takayuki Yokota-Murakami が述べているように、日本の文化が伝統的にはプラトニックな愛と肉欲の愛とを区別してきたという文化背景 (Yokota-Murakami 91-103) がその素地を作り上げてきたと言えるだろう。この伝統においてプラトニックな愛と肉欲の愛は対極には置かれず、後者は道徳／不道徳の価値観で是非を問われるものではない。北村透谷はプラトニックな愛を人間の精神的な美と謳う一方で肉欲を最も下劣で野蛮であると軽蔑したが（Yokota-Murakami 91）、この価値判断が日本文化に浸透していくのは、明治期に西洋の思想が導入された以降のことなのである。しかしながら、西洋化が過去の日本の伝統的な価値観を払拭してしまえるものではない。道徳的には西洋の価値判断が適応されるようになっても、情欲という概念は美的には排除されることはないのである。

さらに、Junko Saeki が指摘した江戸時代の地女と遊女ー家庭を守る妻・母親としての女で性的魅力を持つべきではない女と、教養もあり性的にも男性を魅了する美しい女ーという女性の二つのカテゴリー(Saeki 175)も、日本文化には情欲を芸術として認める素地があることを物語っている。このカテゴリーにおいても、精神的な愛と情愛は西洋におけるような二項対立の優劣関係を含む概念ではない。遊女の情愛をモチーフにした歌舞伎や浄瑠璃のテーマは多彩である。西洋の価値観であればプラトニックな愛を崇高なるもの、肉欲の愛を退廃的なものとして両者を対比させ、情愛を描くことはその退廃の強調という意味合いを持ってしまうはずである。しかし、日本の芸術は、能や歌舞伎、浄瑠璃等に見られるように、退廃や悪であるという観点を持たずに情愛を芸術のモチーフとして描いてきたと考えられる。つまり、日本の文化はプラトニックな愛も肉欲の愛も両者共に対抗概念としてではなく認めてきた文化背景を持ってきたのである。その意味で、日本は男女間の情欲に芸術のモチーフとして独自の美意識を付与してきたと言えるのではないか。

現実の世界に適応される二項対立の価値観、あるいは非現実世界の要素を作品解釈に用いるかどうかという点については、キリスト教の価値観の有無が大きな要因と考えられる。上述した西洋の二項対立に基づく愛についての価値判断に関しても同様に、キリスト教の規範が作り上げたものであろう。西洋の文化においては、キリスト教の価値観や聖書の世界観が現実の世界の根幹に強固に存在する。キリスト教の価値観は、道徳的／不道徳的、倫理的／非倫理的という明確な二項対立の道徳観及び倫理観を作り上げ、それらを現実の生活や精神における規範としてきた。キリスト教の二項対立の価値観は西洋文化に深く根付いており、この価値観を無視した世界観を構築することは西洋人の心性として困難に違いない。文学テクストの解釈においても、その価値観の適応は例外ではないであろう。キリスト教が世界観の形成に支配的に作用する西洋では、作品世界の理解には現実世界と同様の価値判断が必要となるのである。『サロメ』のように聖書の価値観に対抗するような作品こそ、キリスト教に基づく価値判断から逃れることなしには解釈され得ない作品と言えるのではないか。一方日本では、キリスト教が文化背景ではないことに加え、仏教や神道・

儒教等の東洋独自の思想があっても、それらが道徳観や倫理観の形成にキリスト教ほど決定的・支配的ではなく、キリスト教に匹敵するような一つの世界観を形成できる価値体系の存在が顕著ではない。この意味で、日本人読者にとって、キリスト教やその他の宗教の世界観や思想背景にとらわれることなく、文学テクストの中に現実とは別物として非現実の作品世界を構築することは比較的容易なのではなかろうか。つまり、善／悪、道徳／不道徳のような対抗概念を解釈の装置として用いるよりも、そのような現実の価値基準を超越したところに解釈の基準を置くのである。

５．おわりに

以上のように、西洋と日本の『サロメ』解釈の相違は両者の文化の違い、特に文化背景におけるキリスト教の有無が大きな要因であると結論づけられるだろう。両者は全く異なる価値観で『サロメ』を解釈している。英米では物議を醸し、キャノンとして位置づけられることのないこの作品が日本で好意的に受容されてきたのは、上述したように、西洋よりも日本文化の方が『サロメ』の異様とも言える独特の作品世界を享受しやすい素地があったからであると言えるだろう。

このように、文化による作品解釈の違いを理解することによって、それぞれの作品が持つ潜在性が明らかになってくる。『サロメ』に例示されるように、作品の解釈は読者の文化背景によって規定される。これはつまり、受容する文化（目標文化－target culture）のもとで、起点文化（source culture）に位置していた作品が異なるテクストへと変容し得ることを意味する[11]。このような異なる文化における作品の変容に焦点を置く視座を通して、作品に潜む多様な可能性を明らかにすることが出来る。解釈の規定を共有する同一文化の中だけでは、この可能性には決して到達することはできないのである。『サロメ』は日本文化の中で作品の新たな可能性がうまく開示し得た例と考えられる。『サロメ』に限らず、作品の多様な可能性の扉を開くためには、起点文化での作品解釈との比較を通して、目標文化での受容の独自性を理解していく必要がある。そのためには、批評、翻案、翻訳などを外

国文学作品の変容の表象として考察することが不可欠だと言えるだろう。

Notes

本稿は日本英文学会北海道支部第 47 回大会、研究発表において口頭発表したものを加筆・修正したものである。

[1] 明治・大正時代の翻訳については井村君江氏が『「サロメ」の変容－翻訳・舞台』の中で書誌としてまとめている。

[2] Beckson, Karl (ed.), *Oscar Wilde: The Critical Heritage*, (London: Routledge, 1970), 133.

[3] *Ibid.*, 134

[4] *Ibid.*, 135-7

[5] *Ibid.*, 134

[6] *Ibid.*, 142

[7] 当時のサロメ上演について井村氏による上演一覧があり、本稿はそれを参照している。

[8] 泉鏡花　『天守物語』(『夜叉ヶ池・天守物語』　岩波書店 1984)
獅子頭像に護られた白鷺城の天守閣（人の世ではない）に住む富姫のもとに、妹の亀姫がある城主の生首を持って訪れる。その生首を愛でた富姫は、亀姫に褒美に白鷺城主の白鷹を与えて帰すが、その鷹を探して鷹匠の図書之介が天守閣に来る。富姫は一目で彼を愛し、城主の家宝の甲冑を与えて下界へ返す。人間界に戻った図書之介は甲冑を盗んだと疑われ、追われて再び天守閣に戻ってくる。富姫と図書之介は獅子頭の背後に隠れるが、獅子の目が追っ手に傷つけられ、同時に二人の目も見えなくなる。そこへ獅子頭を作った工人・桃六が現れ獅子の目を開けると、二人の目も見えるようになる。桃六は人間界の雑然さをあざ笑い、天守閣の世の美しさを称える。

[9] 横光利一　『淫月』(『横光利一全集 第 12 巻』　河出書房新社　1982)
一人の姫が外界からの笛の音が聞こえてから、その音色に魅了されてしまう。笛は成仏できぬ一人の僧侶が奏でているもので、姫にはその音色が聞こえる。姫は僧侶の世界と現実の世界を行き来するようになり、日増しに僧侶への想いを強めていく。姫の主人（愛人）は姫が物の怪に憑かれたと心配し、その物の怪を祓おうとして姫を刺し殺してしまう。

[10] 谷崎潤一郎　『法成寺物語』　(『谷崎潤一郎全集　10』　改造社　1930)
藤原道長が建立している法成寺で仏師・定雲が道長の愛人の四の御方生き写しの美しい菩薩像を完成させる。定雲の師は阿弥陀像を彫るために敬虔で美しい僧侶・良圓を呼ぶが、良圓は四の御方を写した美しい菩薩像に魅了され、目には情欲の炎が浮かぶ。良圓は自分が恐ろしくなり寺に戻るが、表情が変わる以前の良圓そのままの美しい阿弥陀像が完成される。道長は法成寺完成まで阿弥陀像を見ることを禁じていたが、四の御方は自分に恋焦がれる定雲に頼み込んで法成寺に忍び込む。阿弥陀像を見た四の御方は、その阿弥陀像に表れている男こそが自分が心から恋をできる相手だと直観し、魅了される。一方道長は法成寺に忍び込んだ者を捕らえて殺すように命じてしまう。

[11] ‘source culture’と‘target culture’は translation studies の分野で一般的に用いられている概念であり、オリジナルのテクスト（source text）を生み出す文化を source culture、その翻訳（target text）が生産される文化を target culture と定義している。本稿は後者について、翻訳を一つの受容形態と考える Andre Lefevere の論(Andre Lefevere, ‘Mother Courage’s Cucumbers: Text, System and refraction in a theory of literature’ in *Modern Language Studies* 12: 4, 1982, pp3-20)に基づき，テクストが受容される文化という意味で用いている。

Works Cited

Beckson, Karl (ed.), *Oscar Wilde: The Critical Heritage* (London: Routledge, 1970)

Cohen, Philip K., *The Moral Vision of Oscar Wilde* (London: Associated University Press, 1978)

Easthope, Anthony, *Literary into Cultural Studies* (London: Routledge, 1991)

Hayashi, Chikio and Kuroda, Yasumasa, *Japanese Culture in Comparative Perspective* (Westport: Praeger, 1997)

Nassaar, Christopher, *Into the Demon Universe* (New Haven: Yale University Press, 1974)

Saeki, Junko, 'Eroticism and Motherhood: A Cross-Cultural Study on the Fantasy of Motherhood' in *Comparative Literary Studies 35, 1998*

Shewan, Rodney, *Oscar Wilde: Art and Egotism* (London: Macmillan, 1977)

Toepfer, Karl, *The Voice of Rapture: A Symbolist System of Ecstatic Speech in Oscar Wilde's Salome* (New York: Peter Lang, 1991)

Willoughby, Guy, *Art and Christhood: The Aesthetic of Oscar Wilde* (London: Associated University Press, 1993)

Yokota-Murakami, Takayuki, *Don Juan East / West: on the problems of comparative literature* (Albany: State University of New York Press, 1998)

石崎等 「ワイルドと大正文学」山田勝（編）『オスカー・ワイルド辞典』（北星堂書店 1997) pp.502-3

井村君江『サロメの変容：翻訳・舞台』（新書館 1990）

木村克彦『ワイルド作品論』（新樹社 1993）